

＜自由研究発表要旨＞

第一会場

アグリカルチュラル・インボリューション再考 —戦後日本におけるインドネシア社会経済史学 学史の一側面—

大橋厚子（名古屋大学）

1963年に発表されたクリフォード・ギアツの
アグリカルチュラル・インボリューション論は、
1970年代から80年代にかけてこれに反論する
実証的研究が多く公開され、批判し尽くされた
かにみえた。しかしその後中国研究などで援用
が見られた。近年では日本でもインボリュエ
ション論の翻訳書が出版され、日本経済史にお
ける勤勉革命と比較されるなど、再評価の動き
がある。これに対して本報告は、以下の手順で再
批判を行う。この作業は、戦後日本におけるイ
ンドネシア社会経済史学史の歩みを新たな側面
から回顧する試みでもある。

第1に、上述のギアツ再評価の動きを紹介し、
これらの再評価が1970年代・80年代の研究を
踏まえたものでなく、先行研究の蓄積を知らな
いままに行われていることを示す。

第2に1970年代から80年代にかけて行われた
インボリューション論批判の主要な論点を日本
人研究者の業績を中心に簡単に整理し、これら
の議論の到達点を紹介する。そしてこれらの議
論が近年のインボリューション論復活を止め得
なかった理由を考える。

第3に、現在ギアツ再評価に組する研究者がイ
ンボリューション論に見いだしている利点につ
いて、インボリューション論が本当に有効であ
るかを検討する。日本経済史における速水融を
中心とした勤勉革命の概念とインボリュエシ
ョンを対比させる試みを紹介し、インボリュエ
ション論ではジャワと日本との対比が大きな論
点のひとつとなっていたが、1970年代・80年代
の批判ではこの点に言及する研究はほとんど無
かったことを指摘する。そしてギアツが日本と
ジャワの発展の違いの要因を何に求め、どのよ
うに説明していたか、そして説明のあり方が極
めて漠然としていることを指摘する。

第4に、日本におけるジャワ社会経済史研究の
中に見いだされる、上に述べたインボリュエシ
ョン論の利点を批判的に発展させる要素をすく
い上げて時代順に提示する。すなわちインボリ

ューション論が注目した稲作、輸出用作物栽培
そして権力（中央政府）の3者の関係について
言及する諸研究を、ギアツの時期区分である強
制栽培制度期、農園企業期を用いて、日本の状
態との違いを念頭に置きつつ整理する。

そして最後にジャワ島における社会変化と勤
勉革命論を学的に実り多い形で結合させるため
に、農民による農業経営権掌握の度合いの検討
が必要であることを主張する。

1930年代ジャワにおける日本人商店の活動と その取引関係に関する一考察 —スマラン加藤商店を事例として—

泉川 普（広島大学大学院）

1930年代初頭、蘭領東インド（蘭印）では日
本からの輸入が増加し、33年には対日輸入額が
総輸入額の3割を超えるに至った。それは世界
恐慌の影響により引き起こされた住民における
現金不足と購買力低下、そしてその結果として
の安価な日本製品への需要の高まりによるもの
であった。従来の研究では、これを契機として
日本人商人が消費者へ直接販売するようになり、
日本人による流通把握が進んだとされてきた。
特にP.ポスト氏は「日本人ネットワーク」の形
成を検討し、それを通じて日本製品が運ばれた
と論じている。

しかし、それらは日本人の商業活動を一般化
しすぎており、具体的な取扱商品の分析がなさ
れていないために日本人の具体的な商業活動や
流通への関与が見えてこない。例えば綿製品の
流通では依然として華人の影響力が大きいと考
えられ、またどの地域を対象とするかによっ
ても事情は異なってくる。そこで本報告では、ス
マランの加藤商店に焦点を当て、同店の1930
年代における活動と取引関係を検討し、それを
規定した要因について考察することとする。

当時のジャワでは、日本人の大半はバタビヤ、
スマラン、スラバヤの都市部に居住していたが、
特に東ジャワでは地方都市や村落に住み、住民
相手に商業活動を行うものが存在していた。彼
等は1920年代より同地に進出し、場合によっ
ては華人と競争を演じていた。それは当地域が
比較的開発が新しい地域であり、商業活動に新
たに参入しやすかったからである。一方、中ジ
ャワでは既に華人が商業上の地位を確立してお